

抱える問題とボランティアとの関係については今日ホットな議論になっており（仁平典宏『ボランティアの誕生と終焉』名古屋大学出版会、二〇一一年、大野更紗「新しい公共」の分岐点——震災復興のなかの社会保障改革」『シノドスジャーナル』二〇一一年六月二一日）、福祉を支える宗教的内発性をあくまで探究しつつ、多様な動機とニーズを結ぶ「文化的空間性」に注目する著者の姿勢はこうした批判的議論において有効なのではないかと思う。

おわりに、今日、東日本大震災という未曾有の経験をもとに、支援と復興における共助に果たす神社の役割にあらためて注目が集まっているが、著者があとがきで触れているように、「神社の存在意義をあらためてとらえ直す」（中略）：役割：（中略）：の自覚が多くの方々の不幸の上に成り立っているという事実」（二二九頁）をともに銘記させていただきたい。

津田雅夫編

『昭和思想』新論

——二十世紀日本思想史の試み——

文理閣 二〇〇九年七月二〇日刊

A5判 三三六頁 三三〇〇円＋税

藤田正勝

本書は津田雅夫「逆説」と「弁証法」——「昭和思想家」の成立をめぐる——、森下直貴「西田・三木・戸坂の思想と〈ものの思考〉——「経験と制度」の歴史哲学への視座——」、別所良美「超国家主義と国民国家の自己超越——北一輝の「純正社会主義」の再評価にむけて——」、三谷竜彦「現代の「美しい国づくり」と柳宗悦の「美の国」構想」という四つの長編の論考からなる。取りあげられている思想家も、思想の内容も多様であるが、執筆者のあいだで課題意識は共有されているように見える。その共有された課題意識をわれわれは「〈昭和思想〉新論」という表題のなかに見てとることができるであろう。この表題のなかに込められた編者や執筆者たちの意図についてまず見ておきたい。

執筆者たちは今日の実況状況を「文脈を失い、方向を喪失」（三三二頁）した状況と捉えるところから出発する。そのような状況のなかで一定の方向を見いだしたいという意図が、本書を根本において支えている。その課題を、今日の実況状況の由

って来るところである「昭和」という時代を振り返り、その内実を明らかにすることによって果たしたいというのが執筆者たちの意図であったように見える。日本近代という視点に立てば、当然「明治」という選択肢もありえたと考えられる。しかしなぜ明治ではなく昭和なのか。その問いに対しては「序——〈昭和思想〉の構想——」のなかで、昭和という時代が、「近現代日本の抱えた思想的矛盾の凝縮・集約」であるとともに、その「新たな展開の可能性」をはらむからだと答えられている。

しかし、昭和の思想を主題とした研究はこれまでも存在する。すでに一九五八（昭和二三）年に竹内良知によって『昭和思想史』（ミネルヴァ書房）が編まれている。西田幾多郎から河合栄治郎まで十名の戦前の思想家の思想と、高坂正顕・高山岩男らの「世界史の哲学」が批判的に検討されている。また一九七一（昭和四六）年にはとくに一九三〇年代に思想に焦点を合わせた荒川幾男の『一九三〇年代——昭和思想史』（青木書店）が出版されている。さらに平成に入ってから——つまり「昭和」を客観視できる距離が生じてから——、鷲田小彌太の『昭和思想全史』（三一書房、一九九一年）、桶谷秀昭の『昭和精神史』戦前篇・戦後篇（文藝春秋、一九九二・二〇〇〇年）などが刊行されている。

本書の執筆者らは、以上に挙げたような従来の研究を否定することが本書の目標ではないということを明確に語っている。それを踏まえつつ、「昭和思想」についての新しい構想を提示したい（三二二頁）というのがその意図するところであった。それではなぜ「新しい構想」を提示する必要があるのか。それ

は昭和思想史独特の困難さと関わっている。これまで「昭和思想史」が構想されたとき、それは「戦後思想史」によって区切られ、逆に「戦後思想史」は「昭和思想史」によって区切られていた。しかし現在の視点から昭和を振り返ったとき、その区切りがいまいとなり、その結果、「昭和思想史」の輪郭が不明確となっている。そこに、新たな観点から「昭和思想史」を構想する必要性が生まれているというのが執筆者らの見解である。

それではその「新しい構想」とは何であろうか。それを執筆者らは「二十世紀思想史」という観点から昭和思想史を描き出すという点に見いだしている。「世界的な二十世紀大衆社会論」の展開のなかに、日本の戦前期および戦後期の思想展開を、一貫した「流れ」として位置づけてみる（三頁）という言葉でそのことが言い表されている。その場合、二十世紀という時代をどのように捉えるかということが問題になるが、二十世紀の世界史の根本的な変化・変動を捉えるために、執筆者らは「大衆」と「世界」という二つのキーワードに注目している。「大衆」もまた、二十世紀という時間の流れのなかで大きく変貌した。この変貌を執筆者らは「教養」の変貌として捉える。そして「世界」こそ、この「教養」の内実を露わにさせる試金石である（四頁）というのが執筆者らの理解である。

以上のような課題意識と視点設定のもとで執筆された四つの論文の具体的な内容について以下で見てみたい。まず津田雅夫の「逆説」と「弁証法」——「昭和思想家」の成立をめぐつ

て——」であるが、そこでは西田幾多郎、三木清、戸坂潤の思想が取りあげられている。津田はこの論文の冒頭で、彼らを「昭和思想家」として括り、論じることによどのような意義があるのかということに自ら問うている。つまり、「昭和思想」なしい「昭和思想家」は確定した内容をもつものとして予め前提にされているのではなく、むしろ探求されるべきものとして暫定的に置かれた概念であると言いうことができるであろう。西田幾多郎の後期思想の成立から出発し、三木清や戸坂潤によるその摂取と批判を通して「昭和思想」という思想地平が切り開かれていくプロセスを具体的に見てとること、そしてそれを通して「昭和思想とは何か」という問いに答えていくことが目ざされていたと考えられる。そして津田によればこのプロセスは「弁証法」を軸に展開された過程であった。より詳しく言えば、西田によって「無の弁証法」が確立され、三木、戸坂らによってそれが批判されていく過程であった。しかしそれは「無の弁証法」が否定されたという意味ではない。むしろ津田は、三木が観照的性格を有した西田の「行為的直観」をレトリックと形の創造という実践において乗り越えようとしたこと、また戸坂が西田の観念論を「クリティシズム」の遂行としての唯物論によつて克服しようとしたことを、「無の弁証法」の新たな展開として捉え、三木と戸坂とを西田哲学の正嫡として位置づけている。そこに本論文の一つの大きな特徴がある。それとともに注目されるのは、そのような展開の過程を考察する上で、「レトリック」と「文学」という概念が考察の基軸に据えられている点である。出発点は三木のレトリック論である。それを踏ま

えて、戸坂と小林秀雄とのあいだで交わされた「文学」あるいは「文学主義」をめぐる論争が取りあげられ、論じられている。三木はレトリックという視角から公共性や公共圏の問題を論じる地平を切り開いたが、文学主義を積極的に引き受けようとする小林の議論も、戸坂のクリティシズムも、それぞれに三木のレトリック論を展開したものとして位置づけられる。この共通の議論の場が切り開かれ、展開されていったところに、津田は「昭和思想」という議論の地平の成立を見てとろうとしている。

森下直貴は「西田・三木・戸坂の思想と〈ものの思考〉——「経験と制度」の歴史哲学への視座——」のなかで、まず、なぜ「昭和」を、そして「昭和思想」を問題にするのかをめぐって次のように述べている。昭和という「現代的近代」は、伝統を基盤にした「伝統的近代」、そしてグローバル化する未来につながる「今日的近代」をも抱え込み、日本社会のモダニティのすべての段階を包含しているが故に、われわれはそこに、「伝統的近代」から「今日的近代」に至るまでのすべての「常識」、つまり人々によつて共有され、慣習化された社会的行動の基準としての「共通見識」（コモンセンス）の変容を見とることができる。その窓口になるのが「昭和思想」であるというのが森下の理解である。森下の最終的な関心は、この日本社会における「常識」の変容の流れ全体を把握することにあると言つてよいであろう。さて、その「昭和思想」を展望するための窓口として選ばれたのが、基本的には「伝統的近代」に属した西田幾多郎と、西田の思想を歴史的現実へと向け直す役割を

果たした「現代的近代」に属する二人の弟子、三木清と戸坂潤であった。この三人の思想家のなかに森下は二つの思考の葛藤・緊張を見いだす。西田の根本的な関心は宗教的な自己の探求に注がれていた。そのよう観点から森下は、西田の思索の根底にあったものを「自覚の思考」として捉えている。しかし西田は、その思想の最終形態においては、現実の世界を無数の我（もの）が相互に働きあい、限定しあう世界として捉える「ものの思考」を展開している。この「ものの思考」は西田ではなお「自覚の思考」から十分に自立したものとはなっていないが、それを際立たせ、「自覚の思考」から自立させたのが三木清であった。三木は西田の「ものの思考」を受け継ぎ、それを客観的な「形の論理」へと仕上げていった。しかしこの「形の思想」は、三木の思想をその根底において規定していた「虚無の思考」と強く結びついていた。「ものの思考」をこの「虚無の思考」から切り離し、自立させる方向へと推し進める役割を担ったのが戸坂潤であった。戸坂はそれを、思想を日常的な生活意識のなかに置き直すことによって果たしている。「ものの思考」は戸坂において日常化されたと言ってもよい。ただ戸坂も時代的な制約から完全に解放たれてはいなかった。しかし、「ものの思考」を徹底化する上で戸坂は大きな役割を果たした。森下が目ざすのは、このように西田から三木へ、そして戸坂へと受けつがれてきた「ものの思考」をさらに発展させ、「経験と制度」の歴史哲学を構想することであつたと考えられる。

別所良美は「超国家主義と国民国家の自己超越——北一輝の

「純正社会主義」の再評価にむけて——」において、まず、戦前と戦後との絶対的な断絶を強調する従来の「昭和思想」理解の妥当性を問題にしている。たとえば、戦前の天皇制ファシズムと軍国主義、そして戦後の平和と民主主義という対比はもちろん両者の違いを明瞭に際立たせているが、しかしその明瞭すぎる対比がおおい隠してしまうものがあるのではないかという反省が別所の考察の出発点にある。昭和思想を把握するために当然の前提とされたきたものをいったん「括弧に入れ」てみたとき、そこにむしろナショナリズムと民主主義との錯綜した思想的連関、さらにはその一貫性を見てとることができるのではないかという洞察が本論文の根底にある。そのために別所が目するのが、北一輝が『国体論及び純正社会主義』などで展開した思想である。北の思想は確かに超国家主義として特徴づけられる。しかしそれは単に極端な国家主義にとどまるものではなかった。というのも、北のなかには天皇制や国体概念の仮構性に対する深い洞察が存在したからである。それらは言わば社会を変革する（改造する）ために利用される資源として捉えられていた。北の言う国家主義はその完成形態においては、近代的国民国家を超越する、国家主義であつたと別所は解釈する。別所が北のこの意味での超国家主義に注目するのは、それが国民国家を超越する論理を内包していると考えられるからである。別所のもう一つの問題観心は、現代アジアにおけるナショナリズムとどう向きあうかというものである。その観点から別所は、北の超国家主義が他のアジア諸国のナショナリズムをも積極的に認める可能性をはらんだものであつたことに注目してい

る。

三谷竜彦の論文「現代の「美しい国づくり」と柳宗悦の「美の国」構想」は、近年の景観保護への関心の高まりを背景に推進されつつある「美しい国づくり」の運動がはらむ問題性に目を向けたものである。その問題を考察するために三谷が手がかりにしたのは、民芸運動の創始者として知られる柳宗悦の「美の国」の構想である。柳の民芸の美、「平常」の美の理論は必ずしも政治的な意図をもったものではなかったが、しかし時代の流れのなかで、それは政治との距離をちぢめていった。たとえば「新体制と工芸美の問題」や「時局と美の原理」などの文章が示すように、柳は、戦争が濃い影を落としたはじめたとき、自らの思想と全体主義的国家体制とが親和性を有することを語りはじめた。それと同様に、「美しい国づくり」の運動のなかにも、その出発点がどのようなものであれ、全体主義的な志向が潜んでいる可能性を見とることができると。しかし三谷は他方で、それが地域住民によって主体的に担われるものであるときには、地域住民相互の結びつきを強める働きをもちうる点にも注目している。そのような条件の下では、地域コミュニティの再生といった積極的な役割を果たしうる可能性を秘めていることを三谷は主張している。

以上の論考はいずれも独自の視点から〈昭和思想〉の本質に迫ろうとした論文であり、日本哲学史、あるいは日本思想史研究の新たな地平を切り開くものであると断言することができる。全体を通観したとき、本書は以下のような特徴を有している。ま

ず、昭和思想史と戦後思想史という区切りを自明なものとしてせず、むしろそれを一貫したものとして捉えている点、さらに昭和という枠を超えて、「二十世紀思想史」のなかにそれを位置づけようとしている点である。また、「現在」という視点を考察の基礎に据えている点もその特徴の一つである。それはたとえば二十一世紀におけるアジアのナショナリズムに目を向け、アジアにおける共生の可能性を探ろうとしている別所論文や、柳の「美の国」の構想と現代の「美しい国づくり」の議論が重なること、そしてそれらがともに同じ問題性をはらむことを論じた三谷論文などに見てとることができる。本書が目ざすのは最初にも述べたように、「昭和思想」新論であるが、そこで考察される〈昭和思想〉は単なる過去のエピソードではない。それを現在との関わりをのなかで、新たな視点から新たな問題連関のなかで問おうとする点に本書の特徴がある。そのような考察を踏まえて二十一世紀「大衆社会」の新しい像を語ることも本書は目ざしている。それは今後に残された課題とすることができると、興味深い論点であることはまちがいない。

本書から評者もまた多くの知見や刺激を得た。しかし通読する過程でいくつかの疑問をも抱いた。それを最後に記して、この書評を閉じることにしたい。まず第一に抱いた疑問は、「二十世紀日本思想史」という視点から昭和の思想史を描くことで、はたしてそれに明確な輪郭を与えることができるのであるのかという疑問である。むしろ「昭和思想史」の輪郭をあいまいなものにし、それを解体してしまうことにつながらないかという疑問を抱いた。それははたして、新たな観点から「昭和思

「想史」を構想するという執筆者たちの意図にそったものと言えるであろうか。この疑問は、執筆者たちが本書を通して「二十世紀日本思想史」の、また「昭和思想史」の明確な像を提示しえたかという問いでもある。

付け加えて言えば、本書では西田幾多郎、三木清、戸坂潤、北一輝、柳宗悦の思想が取りあげられているが、その選択は、新たな観点から「昭和思想史」を構想するために、また「二十世紀日本思想史」を構想するために必要な、あるいは必須なものとして十分に根拠づけられているであろうか。また執筆者らは二十世紀の世界史の根本的な変化・変動を捉えるために「大衆」と「世界」という二つのキーワードに注目しているが、この基本視座の設定も十分な根拠を有しているであろうか。たとえば「近代化と伝統との相克」とか、「戦争」とか、別の視点設定もありえたのではないだろうか。いずれにしても、なぜ「大衆」と「世界」でなければならないのかという根拠づけに関する議論が必ずしも十分でなかったという印象を評者は抱いている。

しかし、本書が日本思想史研究の新たな地平を切り開くものであり、多くの可能性をはらんだものであることはまちがいない。以上に述べた評者の疑問に対しても、執筆者らが今後の研究のなかで明確な答を示されるであろうことを期待している。

安丸良夫・喜安 朗編

『戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆——』

山川出版社 二〇一〇年二月一日刊
A5判 xii+四四一頁 三五〇〇円＋税

栗 津 賢 太

本書は、「歴史・宗教・民衆研究会」（一九九九―二〇〇八年）において一〇年間継続された議論を踏まえて出版された、戦後知の系譜学の試みである。「まえがき」によれば本書は「戦後啓蒙主義の遺産を批判的に継承しつつも、それを越えてどのような思考が現在、可能になっているのか、現在から将来に至る思考の可能性を模索する試み」であり、「現在の視点から過去の知識人たちの語りを、歴史的制約を被った時代遅れのものとして批判するのではなく、その語りに添うようにして彼らの知的格闘を検証して、その痕跡に可能性を見出していくこと」を目的としている。つまり本書は知識についての知識に属する書であり、本書が参照している知識は膨大である。ここでは限られた紙枚と評者の非力を顧みず、宗教学あるいは宗教史研究において本書をいかに受け止めるべきかについて考えてみたい。